婦人と新社會

山田わか主筆

大正九年二月二十三日第三種郵便物認可
大正十年十一月二十三日印刷納本

十二月號

每月一回一日發行　第二拾二號　大正十年十二月一日發行

東京婦人と新社會社發行

山田わか著譯書目

社會に額づく女（定價二圓三十錢）東京麹町區平河町六ノ一　耕文堂發行

（マグダレン・マルクス原著）
女（定價二圓八十錢）東京麹町區平河町六ノ一　耕文堂發行

若き愛と智の眼覺（定價一圓二十錢）東京牛込區新小川町三ノ十九　日本社

婦人の解放と性的教育（定價七十錢）本郷區湯島天神町一ノ八二　東洋出版社發行

再版
戀愛の社會的意義（定價二圓）東京市四谷區南伊賀町四一　婦人と新社會社

女・人・母（定價一圓七十五錢）東京本郷森木町二丁目　森江書店發行

（ウイバー女史原著）
八時間勞働の理論と實際（定價四十錢）本郷區湯島天神町一ノ八二　東洋出版社發行

愛と生活と（定價一圓三十錢）東京神田裏神保町六番地　三德社發行

（マイナー女史原著）
賣笑婦の研究（定價一圓六十五錢）東京麹町區飯田町一ノ二　天佑社發行

婦人と新社會



愛には九ッの要素があることをドラモンドは説明しました。則ち

○愛は忍耐である。愛のためには長い苦痛を忍ぶ。

○愛は親切である。愛の對者に不親切な行爲は考へられない。

○愛は寛大である。純粋な愛には嫉みはない。

○愛は謙譲である。愛は誇大な言を愼む。

○愛は丁寧である。愛は粗雑な行動を避ける。

○愛は無私である。決して利己主義でない。

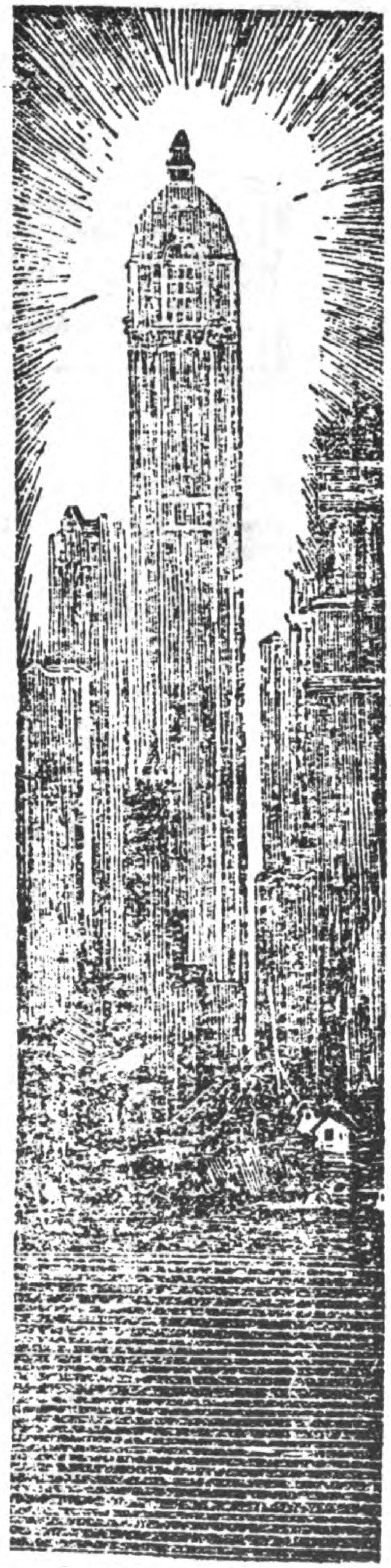
○愛は温和である。みだりに氣を立てない。

○愛は實直である。愛は不善を考へない。

○愛は公明である。不正を厭ひ眞理を喜ぶ。

これを以てクリスマスの祝詞に代へます。

クリスマス號



嗚呼原首相

原首相の遭難を報じた號外を手にした時、私はとゞろく胸を押へて其の一字一句の中から、首相の受けた傷の程度を知らうとした。そして『一旦、倒れて起き上がろうとする首相に、もう一太刀浴びせようとして、狂漢は捕へられた』とあつたので、傷はあまり深くはなかつたろうと思つた。起き上がろうとする力が首相にはあつたのだから命には別條がない程度のものだろうと考へ、又、さうあることを念じながら其の晩は休んだ。

けれども、首相の安否を氣遣つて朝の新聞を待ちかねてゐたが、平日よりは二時間も後れて配達された新聞を見ると、一晩中念じてゐたことはすつかり裏切られてゐた、刺されると同時に首相は倒れて、そして、間もなくこときれてしまつたのだつた。けれども、私はまだ、昨夜の號外が正確ではなかつたように、此のいまはしい報道も誤まりであるかも知れない、誤まりであれ、と又も心に念じ始めた。併し、後から〳〵投げ込まれて行く新聞の記事を詳細に見て行くうちに、もう、疑ふ餘地はなくなつた。

其の時、始めて、

　原首相は死んだ！　殺された！

と云ふ事實が私の頭を締めつけてしまつた。そして、此の兇行を敢へてした奴は？と見れば、まだ思慮分別の定まつてゐない靑二才！　原さんは狂犬の毒牙に罹つて殪れたと同じである！　一代の名宰相が病犬に嚙みつかれて死んだ！　と云ふ思ひが私の胸をかきむしつて、私は、唯、腹立たしく、痛ましく、俤なく、悲しく、其の日は終日心の置き場に窮して居た。

議會開會當時、どの新聞であつたか、誰であつたか忘れたけれど、原氏に護衛がついてゐるのを見て、平民宰相の名に背くと云つて嗤つてゐたけれど、私は其の時、平民宰相でも何でも、社會に狂人や大馬鹿者がウヨ〳〵して居る間は止むを得ないではないかと思つてゐたが、護衛を嗤つた人は今こそ思ひ知つたろう。

原さんの施政方針に反對な人はあつたろう。けれども、それは、意見を戰はして原さんを屈服させれば足りるので、とにかく、手腕のある此の一代の大政治家、百歳迄も百二十五歳迄も生きてゐても仕事はしきれない、して貰はねばならなかつたものを狂犬に嚙みつかれたような死なせ方をして、誰か悲憤の涙を流さないものがあろう。

そして、こう云ふ狂暴漢を生んだ責任は、日頃の無責任な言論にあることを知らなければならない。新聞雜誌上に於て、原氏が幾度も〳〵『國賊』呼はりをされてゐたことは私が此處に云ふ迄もなく、世間周知の事實である。けれども、さう云ふ人が心から原氏を國賊と思つてゐたのではあるまい。とにかく、生命を賭して國事に當つてゐ

る人に對して、さう思ふ道理がないから。けれども、世間の低能兒、非常識漢は、相當な位置にある人がさう云ふならば、本當に國賊であるかのように思ひ込んでしまう。さうして取り返へしの付かい戰慄すべき重大なる過誤に陷らしめてしまうのである。

戀愛の自由には絕大なる責任が伴はねばならぬことを無視した戀愛至上論を聞いて、多くの馬鹿女共が、すぐ、自由戀愛を實行するのと同じ行き方なのである。

あらぬ毒口を吐いたり無思慮なものを敎唆して一人快心の笑みを貪つてゐることは野蠻的であり、悪德であり、時代後れである。

原内閣が成立する前に、人がなくて内閣組織のお鉢がさん〴〵方々へ引き廻はされた上句の果て、とう〳〵西園寺公か、原氏か、と云ふ處迄、漕ぎつけられた時、實は私は西園寺公の蹶起を望んで居た。原氏の冷や〻かな、切れ過ぎるような處があるのに危惧を感じてゐたから。けれども、原氏がいよ〳〵立つた時に、從來の宰相に必ず喰付いてゐた爵位がなく、單なる「原氏」であつたことが非常に氣持ちがよかつた。

そして原氏の仕事を見ると、ボカッ〳〵と人を出しぬくようなことをされるので始

めは少し不愉快であつたが、併し、國民が愚劣で、ともすれば徒らに喧囂を極はむるので、矢張りあれでなくては仕事が運ぶまいと思つて、後には氏のやり口を私は承認した。勝手な熱を吹く有象無象を收攬するには最適材だと思つて居た。

反原內閣の氣が怒濤のように原氏を擊つて行つてもビクともしない氏の剛腹を私は賴もしく思つてゐた。底力のある鐵のやうな意志の氏に國政を委ねて置くことに安心を感じて居た。

そして、今度、既でに〳〵遺書が書かれてあつたことを知つて、議會開會當時の氏の態度を『成程』と合點し、それであるから、信賴するに足るのであつたことを知つた。

東宮殿下御渡中のことであつたが、原氏が『私は當てになる後繼者がありさへすれば今すぐでも此の內閣を開け渡したいが、併し、今、聖上には御惱があらせられるし、東宮殿下御外遊中だし、時局は紛糾してゐる此の內外多事な時に、私が投げ出したら後はどうなるだろう。どんなに苦しくともつらくとも、命のあらん限り邦家のため踏み止まつてゐなければならない。』と云はれたことを私は或る方面から聞いて、其の時

にも氏の苦勞に對して密かに感謝してゐた。

嗚呼、身をもつて國事に當つてゐた其の原氏が一狂暴漢の毒手に殪れた

世界は、今、平和を希望してゐる。如何にせば人類の手から武器を捨てさせ得るか

と云ふことに世界の心は腐心してゐる。其のために、多くの人の時間と、莫大なる金

が費されて華盛頓會議は開かれようとしてゐる。

此の時に當つて、國内に於て、突如として此の血腥い悲劇が演ぜられ、しかも、

一代の大政治家、紛糾した時局をあざやかに收拾し得る敏腕家が殪れた。

實際の行爲から出立した議論でなく、唯、單に、反對しようがための反對論、愚民

を煽動するために弄ぶ放縦無責任な言論が、公然新聞雜誌にはびこる間は、此の地上

に決して平和は來らないことを知らなければならない！



白蓮女史の行動は自覺か放縱か

白蓮女史の家出事件が新聞紙上に現れた時に、私は、これを取り上げて問題にしようとする氣持ちは少しもありませんでした。なぜなら、不眞面目な浮氣な人がいつも繰り返へし〳〵してゐる、世間にザラにあることで、其處に何にも意味はないと思ひましたから。けれども、たとへ、面白半分だとは云へ、新聞は書いて〳〵書き立てるし、世間では大評判をしてゐるし、且つ又、いくつも〳〵の新聞雜誌から、私の批判なるものを要求して來ますので、こう云ふ風に世間から騷がれる以上は矢張り此の事件に對する私の卑見を發表する必要もあらうかと考へまして、筆をとつて見ることに致しました。そして、あちこちの新聞雜誌へ書いたものを本誌の讀者のために此處に採集致しました。

一

世の中に不思議なものが一つ私にはあつた。そして、それは伊藤傳右衞門氏と曄子女史の結婚生活であつた。私は歌も詩も小說も好きであるが、併し、いつも非常に忙

しい日を送つてゐるので、ツイそれ等のものを味はつてゐる餘裕を持たない。從つて曄子女史の歌にも接觸する機會がなかつた。

けれども、『筑紫の女王』と云ふ如何にも氣高さうな美しさうな名に心を引かれて、時々、婦人雜誌の頁をくッたり、又は、新聞紙上で其の姿を見たりした。そして神の傑作を感歎してゐた。同時に女史に關する記事には、必ず『淋しい』とか、又は『悲しい』とか云ふ形容詞が喰付いてゐて、それが女史の歌から出てゐるものであり、そして、其の歌と云ふのは、女史が自分の夫を呪ひ、且つ世を儚んで居るものだと云ふことも聞いた。

處で呪はれて居る其の夫と、呪つてゐる其の妻が時々連れ立つて上京して、同じ旅館に宿つてゐると云ふことも新聞紙上で知つた。其れが私には不思議だつたのである。丁度相愛してゐる夫婦のやうに、嫌ひ、憎み、呪つてゐる夫と共に旅行をし、同室に起居する女史の心も變なら、伊藤氏も全然女史の歌の心が察しられないわけはないだらうに、どうして、二人はあゝした相結びついて居られるのだらうと云ふのが私の疑

問であつたのである。
そして、後には、あの人達の實生活は女史の歌とは別なものであるのかも知れないと考へた。女史の歌は女史の生活を歌つたものでなく、時々氣まぐれに歌ひ出す、そして、氏も女史の歌を氣まぐれの手すさび位に心得て居られるのだろう。且つ又、一家の主婦としては、法外に自由があるようだが夫れは伊藤氏の雅量を示すものなのだらうなどとも解釋して居た。併し、又此の人達に付いての報道は、いつも、女史を淸い美しい人のように、氏を其の天上の人を汚してゐる野人のやうに書いてあるのはどう云ふわけか？　かりにも二人は夫婦である。であるのに、なせ、氏はあんなことを云はせて置くのか？　なせ女史は其れに對してだまつて居るのかとも考へたり、或ひは二人の間にはシックリ了解が出來てゐて新聞紙上のことなどは意とせずに居るのかも知れないと云ふやうなことも考へてゐた。
處で、今度の事件によつて、長い間の私の疑問に對する答へを私はほゞ得ることが出來た。そして十年間の二人の苦惱が實に痛ましいものがあつたらうと思つた。殊に

伊藤氏に對して同情の念を起した。私も一女性である。そして常に、同性のために働かうとしてゐる。其れにも拘らず、私が女史によりも、むしろ、氏に同情した理由を左に述べて見る。勿論、新聞紙上に現はれたものだけを基礎としたものであることを御斷りして置かなければならない。

二人の間には其の最初から夫婦となるべき要素が全然缺けてゐた、氏は女史の美貌又は權門に、女史は氏の黄金に結婚されたと云ふことは私が此處に云ふ迄もなく、世間の定評である。そして、水と油を調和させようとするのは無理なことで、今日、こう云ふ破目に陷るのは當然なことだと一般に云はれてゐる。

處で、問題は其處にある。最初から意氣相投じた、或ひは、精神と精神が觸れ合つた、所謂戀愛が双方に生れてからの結婚が最上なものであると云ふことは云ふ迄もないのだが、併し、長い過去に於て、戀愛なくして結婚したものは皆、離れるのが當然だと云ふならば、今日の夫婦者の殆んど十中八九迄は別れなければならないと云ふことになる。そして、其れは大不幸事であるに相違ない。

人間の精神を無視して、其の時の周圍の都合のよいように、便宜のために、人間を機械的に扱ふことが不德であり、惡行爲であると云ふことは、極まつてゐる。今更取り立てゝ云ふの必要はない。けれども、始めに機械的であつたから、何處迄も機械的に進んで行つて、そして、破れなければならないと云ふ道理はない。精神の伴はない機械的の、則ち、便宜上の行動をとつたことの誤りに氣が付いて、其の機械的であつたものを有機的なものに、則ち、精神の伴ふものに造り直そうと努力するのが人間の人間たる處であらうと私は考へる。

二

神ならぬ身の人間に過失のあるのは止むを得ない。けれども、過失であつたと氣付いた瞬間から、それを正そうと努力するのが人間の務めである。愛なき結婚をしてしまつたことの誤りに氣付いたならば、其の結婚を破壞する前に、先づ二人の間に愛を生み出すことに努力するのが正しい行き方である。

百方手を盡しても猶調和の見込みが立たなかつた時に、其の時には止むを得ないか

ら別れるのもよい。けれども、別れるにしても、萬止むを得ないので別れる普通の人間ならば、相手方に與へる痛手をなるべく輕くする方法を考へる。處で、曄子女史はさう云ふ點に付いて考へたか？

氏に與へた絶縁狀のうちに女史は『御承知の通り結婚當初から貴方と私との間には全く愛と理解とを缺いてゐました。』と云つてすましてゐる。こうなる以前にも女史の生活は其れと同じ態度で、捨てばちで、夫を苦しめ自分も苦しんでゐたようである。

これに反して

伊藤氏の方には本物の夫婦にならうとする努力の跡が見へる。『俺には文學は分らないのだから俺は無干渉でゐたのだ……』と云ひ、『呪はれながら、尚且つ俺はお前のために凡てを盡して居た。』と云はれる氏の態度と女史の態度との間には其處に人間的に雲泥の差がある。詩才があつても、藝術味が豊かであつても、もし、人間味がとぼしいならば人間としては無價値である。

世間の惡口や、女史の我がまゝに耐へて默々として努力して居られた伊藤氏には同

情が沸く。伊藤氏のやり方には人間味が豊富だからである。けれども、女史は努力と云ふことはせず、我がまゝのありたけを盡し、夫の悪口を世間に公表し、果は愛人が出來たからと云つて、夫に絶縁状を投げつけて去つたと云ふことは何と考へ直しても賛成が出來ない。人でなしと云ふのは、さう云ふ態度をする人間を差して云ふ言葉だと思ふ。

此の度の事件に關する新聞の記事を見て、先づ第一に不愉快であつたことは伊藤氏に對して、野人だとか、一石炭掘りだとか、無學だとか云ふ言葉が用ひられてあることであつた。野人であり、無學であつた一石炭掘りが、とにもかくにも、社會の表面へ一頭角を現し得たと云ふことは實に立派なことであつて、社會は最高な稱號を氏に捧げてしかるべきではなかつたか？　それにも拘らず、社會を代表すべき新聞が臆面もなく、さう云ふ言葉を進ぬるのは恥づべきだと私は思ふ。平生は階級打破だのデモクラシーだのと云つてゐても、いざ事が起つた場合には日頃の主張をコロリ忘れて、所謂身分が高いとされてゐるものゝ方に媚るような態度は實にみつともない。

又私共の意外とした處は、暉子女史の絶緣狀が伊藤氏の手に届かない先きに新聞紙上に現れたことである。前にも云つた通り、人情のある、即ち、人間味のある人ならば、別れなければならないにしても、出來るだけ相手の痛手を輕くしようとするからあんな餘計な苦痛を相手方に蒙らせる筈はない、併し、全くイゴイスチックな自分の存在を知つて、他の人の存在を無視するような女史のやりそうなことだと思つたり、又は、如何にイゴイスチックでも我がまゝでも小供ではなし、女史が絶緣狀を氏に送るだけで女史が氏に與える苦痛は充分だと、女史は女性として感ずる筈であるから、女史が自分の自由意志でことを運んでゐるのなら、あの絶緣狀が新聞記者の手に這入る筈はない、して見ると、女史の今度の行動は自發的のものではないかも知れないと云ふような疑ひも起つて來た。此の事件を面白がつて、乃至は、爲めにする處があつて女史には無斷で或ひは女史の意志を無視して、ことをあやつッて居る人間が女史の身邊に居るのではないかと云ふことを。

そうして、もし、此の疑ひが當つてゐるとすれば、女史の自由を得たいとか、束縛

を脱するためとか云ふ言葉は全く無意味なものになつてしまう。甲の束縛(?)から乙の束縛に移つただけ、しかも、より悪性な束縛の手に捕はれたことになる。

三

「髭男の酒席にキチンと端座してゐる姿などは悪い喩か知らぬけれど山塞に囚はれた小娘の感がある……「宜しい俺が引き受けた」と浪人氏が小鳥の命でも預かつたように芝居もどきで言つてゐる。白蓮の命もこんなに輕卒に引き受けられて好いものか。それに一體誰が浪人氏に白蓮を引受させたのか、白蓮自身なのか。兄に預けてあつた命を九州へ預け替へした十年前と同じような「預け方」で又「引受け方」でないことを私は切に祈つてゐる」と、讀賣新聞十月二十五日の『斬馬劍』欄で、くら生が云つて居られるが、確に、これはくら生一人の感じではない。

實際、山本氏が『一肌ぬぐ』とか『伊藤氏から立派に貰ひ受ける』とか、酒徳利を前へ並べて豪語してゐる處や、又、宮崎氏が『あの女を僕は何處迄も救つてやりたい、僕に依て生きて行かうとするならば救つてやるのは僕の義務です』などゝ云つて納まつ

てゐる處は安芝居を見るようで、且つ又、如何にも時代後れで、新時代に目醒めた權威ある一女性の相手方としては何としても貧弱である。同時に女史の『自覺』なるものを疑ふのである。

實に、女史は新道德の立場から見るならば三重の罪を犯してゐた。戀愛は無くとも人情と云ふものが人間にはある。長い結婚生活の道程に於ては、折には夫婦の間に愛の退潮時もあるだらう。けれども人情と云ふものによつて危い其の隙間がつながれるので結婚生活は其の長い旅を全ふすることが出來る。けれども、人間味にとぼしいつまり人情の薄い女史は伊藤氏の心勞、氏の苦痛、氏の情愛を全然踏みつけてゐた。これが一つ。

女史は伊藤氏が嫌やでありながら、呪つてゐながら、調和する心が毛頭ないのでありながら、現に三年も前から宮崎氏に心を移して居ながら、猶、伊藤氏の妻であるような顔して同棲を續けてゐた。そして、これは今度の反逆よりも一層大きな罪惡である。これで二ッ。

それから、女史は自分自身で伊藤氏に妾を取り持つて居た。自分の嫌ひな男に、自分代りの同性をあてがつてゐた。これが自己に目覺めた人の所爲であらうか？　自己に目覺めると云ふことは自己の尊貴を知ると同時に、他人の尊貴をも認めることである。自己の都合のために他人を陥れると云ふ事は、昔クレオパトラが最後に自己を處置するに當つて、自分が吞まうとする毒藥の利目を幾人かの召使ひに試して見て死に至らしめたと同じ行き方で、其の横暴、殘忍は天使をも怒らしむるものである。これで三ッ。

伊藤氏に妾があつたことは遺憾此の上もないことである。そして自己に目覺めた新時代の女性は妾を持つような男子を夫とすることは出來ないと云ふのは正當な考へである。けれども、これは一般に對して云ふことであつて、少くとも白蓮女史に對して云ふ言葉ではない。もし、女史に自覺と云ふものがあるならば、今も云つた通り自分から夫に妾を取り持つわけもないし、且又、どんなに伊藤氏が放縱であつても、あれ程迄に（日々新聞紙上『曄子へ、傳右衞門から』による。）女史のためよかれかしと努め

てゐたのであるから、女史が愛情を持つて氏に接し、そして書妾の不正であることを諫めたならば、氏も必ず、其の惡習慣を改めたであらうと私は考へる。

四

諄子女史事件を、ノラの家出を見るようだと云ふ人がある。けれども、ノラは愛人が出來てから夫を捨てたのではなかつた。又、他人の手にすがつて事を處置しようとしたのではなかつた。本當に自己に目覺めて、そして、自分一個の手で夫との交渉を濟ませたのであつた。

處で、其のノラの目覺めにしても完全な目覺めではなかつた。人として、單に半分の目覺めに過ぎなかつた。なぜなら、我々が此の社會の中の生きて居て、此の社會と云ふものが我々個人から成つて居るものである以上、我々は社會の一分子である。社會の一分子である我々には、であるから、個人面と社會面との二方面がある。つまり我々には自己を生かす權利があると同時に、社會を害してはならないと云ふ義務があ
る。

けれども、ノラは自己を生かす權利のあることを知つて、社會を生かす義務を知らなかつた。則ちノラは自分に最も近い社會の代表者なる三人の愛兒を無視した。そして、今の新しいと云はれる人の多くが大抵此のノラと同じように半分しか目覺めてゐない。そしてこれが多くの自他の不幸を招いてゐるのである。

もし、ノラが半分の目覺めでなく、全體的に、則ち、個人として社會人として目覺めてゐたならば、夫のヘルマーが前非を悔いてノラの前に膝まづいた時に彼を許し再び結婚し直すべきであつた。人は幾度でも結婚し直すがいゝと私は思つてゐる。始め單なる便宜上、又は、單なる肉の要求から結婚してしまつて、それが悪いと氣が付いたら、お互ひに努力して精神的にもう一度結婚し直すがよい。時過ぎてから、其の結婚があき足らないと思つたなら、もう一度、根深い結婚をするがいゝと私は思ふ。

伊藤氏には其の心、其の努力が充分あつたけれども、併し、瞱子女史には全然なかつた。伊藤氏に當た瞱子女史の絶緣狀の中に『貴方の家庭で主婦の實權を全く他の女性に奪はれてゐたこともありました』と云ふ言葉があり女史に當た伊藤氏の言葉の中

には、『おさきは古くからゐて實貞な質もよく判つて居るから家庭一切の事はなるべくおさきに委せて居たのだつた……お姫様育ちで主婦としては何の經驗も能力もない自分のことを棚に上げて仕舞ひ、おさきが忠實に家内に立ち働き、他の女中迄が彼を立てるのを見てお前はムラ〳〵と例のヒステリーを起し……』とあるが、此點に付ても私は伊藤氏の方に賛成しなければならない。

文學は美しい花である。詩が發散するかほりは芳ばしい。けれども、其の花を咲かすために芳ばしいかほりを發散さすために、其の花の根を培ふ土が必要である。そして其の根を培ふ能力を備へてゐる者が其の能力を働かせ得る範圍内の權力を持つのは理の當然である。私の尊敬する或知人は言はれた。『一家と云はず、たとへ、大きな會社でも其會社の首腦が必ず社長にあるとは限らない。たとへ、位置は玄關番でも給仕でも、もし其の玄關番になり給仕になり、會社のためを思ふ會社中で一番大きな誠意があり其の誠意を實行して居るならば、其の會社の首腦又は生命は其の玄關番か給仕にあるのだ。』と。

實に、實質は會社の首腦であり生命であるにも拘らず、外形なる位置が低いために會社から輕んぜられたり、無視されたりして、そして、實質に於ては會社とは無關係なような人間でも位置が高いために重く用ひられたりする處に、不利益があり、不平等があると云ふのである。して見たならば、伊藤氏を嫌ひ、伊藤家を牢獄と心得てゐる、曄子女史に實權が無かつたと云ふのは、むしろ當然なことであらう。

今迄に現れた事實から判斷すると、伊藤家を樂園にするのも地獄にするのも、實は曄子女史の意のまゝであつたらしい。處で、女史はとう〳〵地獄を造り上げてしまつた。そして愛なき結婚を斷行した自分の罪を棚に上げて、その罪の補ひをしようとする心は少しも持たずに、一切を他人のせいのように云ひなし、氣まゝのありたけを盡し、ツイには好きな男が出來たからと云つて、かりそめにも十年間同棲した夫に熱湯を呑ませるようなことをして去つた。これはあらゆる非難と罵倒に價するものである。

一體、自分の無能を棚に上げてそして、唯、自己だとか權利だとか云ふのが此の頃の流行である。そして、それは不都合ないが、併し主張し得る自己の確定、權利を擴張し得る能力の發達を計ることを忘れて居はしないだらうか？　云ふことばかり氣が利いてゐても實力が伴はないならば、現代人が馬鹿にして居る舊思想の人にも及ばないことになる。そして、舊思想の人達に嗤はれても止むを得ないだらう。

要するに、人生の苦（主に物質方面）を知らない曄子女史は此の人生を眞劍に考へようとはせず、丁度、若い者が戀を戀して弄んでゐたと同じように『愛なき因襲的結婚に對する反逆』と云ふことを弄んで居たのでな　かと私は思　。

五

實に、曄子女史は至る處で、牢獄だの束縛だのと云ふ言葉を使つて居られるが、併し、伊藤氏は『曄子がどんな男と交際しようと、又、どんな方面に進んで行かうと何等の制肘も加へず、又、干渉もせず彼女の云ふがまゝに委して置いた……私が曄子を理解しなかつたとか思想が古いとか云ふことが根本の原因の樣に思はれて居ります、

それ故に、私は嫉妬も起さず障子を自由に開放して置いた、見も知らぬ若い男が何度となく訪ねて來て五時間も六時間も差し向ひで話してゐても私は叱言一ッ云つた事がなかつた……』と云はれて居るが、これは本當であつたと思ふ、なぜなら、女史にさう云ふ自由があつたからこそ、新しい愛人を造ることが出來たのだらう。

氏が女史を愛し、女史の自由を尊重して居たと云ふことは其の他の事實からも窺ひ知ることが出來る。であるから、いつも女史が訴へてゐるように、女史に對する氏の愛がないのではなく、氏に對する女史の愛が無かつたのだ。女史が氏を愛し得なかつたのだ。其れは止むを得ないとしても、もし女史が常識を備へた人情のある人であつたならば、自分が氏を愛し得ない迄も、氏の愛情は感ずる筈であるから、よし、別れるにしても、もつと、穏かに、氏の苦痛を最も輕くする方法で離縁をとる筈である。であるのに、かりにも夫であつた人を、まるで、惡魔か、仇敵でゞもあるように、其の上に、寢耳に水と云ふ調子で絶縁狀を突きつけて、氏に、『意外！』或ひは『信じられぬ！』と云ふ思ひをさせ、新しい愛人に走つたことによつて『氣隨氣儘を仕逍して

氏を苦しめた揚句、爆彈を投げつけた！』と云はれても返す言葉はないだらうと思ふ。

且つ又女史が、階級生活にあき足らずして、自發的にブルジョアの生活からプロレタリアの生活に身を投じたとするならば、他の非點を幾分寛恕される意義があるかも知れないけれども、さうでなく、最近に於て、女史が觸れた、所謂新思想なるものにかぶれたのでありそして『プロレタリアに華族の姫樣の天降りが痛快だとして、女史を賤した者があるとすれば、今後の夫人の生活は、實に悲慘なものと云はなければならない。

六

戀愛は絶對に自由でなければならないことを私は認める。今日迄の重大なる罪惡の一つは人間の生命とも云ふべき結婚を本人の意志が本位でなく、周圍の人の考へによつて定められることの不正を私は知つてゐる。たとへ、親でも、子供の意志を無視して配偶者を定めることは人道の上から許すべからざる罪惡であり、婦人自身が此の點

に氣付かない間は到底女性は救はれないことを私は考へてゐる。

けれども、戀愛の自由には嚴肅な責任觀が伴はねばならぬと云ふことを人は忘れてゐるので、其の自由なるものが惡用されて放縱に流れるのである。であるから、洋の東西を問はず、今日の人間の大部分は、まだ、戀愛の自由を享有する資格が出來て居ないのである。

日本の見合結婚と西洋の自由交際の結果の自由結婚とには其處に進步の雲泥の差があるように多くの人は思つてゐる、けれども、其の內容に至つては、大した差がないことを此處に一言云つて置きたい。男女の交際に最大自由がある處は米國であるが、自由に交際して、自由に婚約して、そして、それが成功した結婚となるのは全體のうちの六七割、或ひは、五割位のもので後は中途で破れてしまうのである。そして、其の破れた婚約のうちの大部分は、始めッから眞面目な結婚が目的ではなく、單なるいたづらであつて、そして、婚約と云ふ言葉は其のいたづらを覆ふて置く蓋なのであ。

であるから、西洋の結婚が進歩的で文明的で、我が見合結婚は野蠻的で因襲的であると云はれて居るのだけれども、併し、成功した結婚の數から云ふならば同じことなのである。否、むしろ、野蠻的因襲的と云はれてゐる我が國の處女の方が其の純潔を保つ機會が多いと云ふことになるのである。そしてこれは新時代を指導しようとする人達の大いに考へなければならぬ點であらうと思ふ。

七

道德は團體生活の利益のために工夫されたものである。各個人の本能の働くまゝの行爲を許して置いたのでは團體としての生活の安定が脅かされるからして、其の本能を押へて個人と個人との間の調和を計ろうとしたものが道德である。一切の習慣、一切の法律が皆其處から出立してゐる。

けれども、人間が進步するに從つて、過去の人に都合よく工夫された其の團體道德は、新人の成長を妨げる場合が往々出來て來た。其處で、其の團體道德に反逆して起つた道德が、個人の感情を尊敬する個人道德である。近世に於て、起つたあらゆる運

動は、勞働運動にしろ婦人運動にしろ、皆、個人の感情に重きを置き、其の感情の働きを自由にしようとする、いはゞ人間の自然權の回復が目的である、

であるから、因襲に對する反逆と云ふことをたとへて見るなら、子供の身體か大きくなつて、もう殆んど一人前になつてゐるのに親は本立の着物を着せようとせず、小さくて窮屈な四ッ身の着物を無理に着せて、其の上の發育を妨げるので、止むを得ず其の四ッ身の着物を裂かうとすることである。

白蓮女史は因襲に反逆すると云つた。社會が女史を覆ふてゐた着物が女史には小さくなつたと云つた。が、果して、女史の云ふ通り、因襲と云ふ着物が女史には合はなくなつた程、女史は成長してゐたか？　高尙な人間になつてゐたか？

團體道德に對する個人道德の勃興は進化の自然の法則であつて嘉すべきである。けれども、新智識を生かじりして、個人道德を主張し得る資格、それに伴ふ責任を自覺せずに放縱を敢へてし、其の放縱を『因襲的結婚の破壞』とか『戀愛の自由』とか云ふ言葉で包まうとすることは婦人の眞の向上の道を汚すものである。

世間には結婚破壊の原因を結婚法の不備に歸してゐる向きが少なくないけれども、それよりも猶重大なる原因は、前にも云つた通り、半自覺の結果、自己犧牲、忍耐、及び、忠實と云ふ要素が缺乏して、そして、利己主義、自己主張、放縱戀愛が跋扈するものであることを、最後に一言附け加へて置かうと思ふ。

海外餘波

基督教婦人大會に於ける講演

十月十一日から十四日迄四日間、英國バーミングハムに於て開かれた基督教婦人大會に於て問題は產業問題、男女の青年期に關する問題、教會改革、基督教倫理、更新問題、傳道に於ける婦人の位置、國民主義及び國際主義等であつたが、中でも、リーナー・アシュエル孃と云ふ女優が『教會と劇』と云ふ題で演說したことや、此の大會の會長バーミングハムの監督の演說は特に聽衆の注意を引ひたと云はれてゐる。監督は云ふ。

「婦人の力は增大して來た。國民が偉大であるかないかは一つにかゝつて婦人によるものである。なぜなら、國民を正しい方向に向はしむるには全く婦人の感化力によらなければならない。そして婦人の其の感化力をより廣い、より大なるものであらさしむるには婦人の人格の訓練が必要である。婦人は婦人の感化力の偉大なものであることを忘れてはならない。婦人は家庭の女王である。故に、婦人は家庭の實際上の實權を握つてゐなければならない。男子の命令によつて家政をとることは無意義である。主婦は家庭に於ては自分の夫をも子供の一人と數ふべきである。主婦は自分の生んだ子供の母であるのみならず、夫の母であらねばならない。隨分大きな厄介な子供ではあるが、併し、此の子供を賢く操縱するのでなければ家庭の女王としての資格がない。そして、此の資格のある婦人方が澤山あることを私は信じる。



教育と社會良心

一、學校の社會的作用

私は教育家ではありませんから、教育に付いての詳細論は專門家に御任せして置いて、唯學校と家庭との關係、學校と社會との關係、及び、社會教育に關して少しく考へて見たいと思ひます。

一體、教育を社會の見地から見ますならば、それは個人を訓練する力であります。其の力によつて個人を社會の目的、社會の利益に添はせる、つまり、個人を社會化する機關であります。又、教育を個人の見地から見ますならば、個人は社會が提供する道具、則ち、學校を利用して自己の才能、内部に潜む力を開發させるのです。ですから、社會的及び個人的の教育の概念は社會並びに個人を絶えず新らたに絶えず成長させようとするものであります。其處で教育の過程には二つ

の要素、即ち、社會的環境と、個人の生來の才能とがあります。そして、其の環境の中には一定の行爲の標準があつて個人は其の標準に調和して行かなければならず、個人の才能は又調和して行かうとする過程のうちにかたちづくられて行くのであります。

ですから、全體としての社會が既でに大きな敎育家であるのです。元始時代の社會に於ては殊にそれが著しかつたのです。なぜなら、元始時代の敎育の大部分は唯無意識に習慣に從つた、進歩と云ふ意味のなかつた、調和であつたのです。併し、今日の進歩した社會に於てゝすら學校及び其の他の凡ての敎育機關に矢張り今云つた微細な無意識な環境の敎育的の力があります。

なぜなら、私共の最も根本的な價値の概念は、大抵の場合ひ、有識な考察の結果ではありません。其の證據には其の價値の概念が何時私共の心のうちにかたちづくられたかを私共は記憶しません。いつの間にか心のうちに出來上がつてゐた概念を正當なものだと思ひこんでしまつてゐます。つまり、子供の時から私共を取り卷いてゐた人間關係から、私共は其の價値の概念を單に吸收して居たに過ぎないのです。そして、かう云ふ狀態は永久に續くように思へます。其處で、人間の性質を無意識のうちに造るものは社會良心であると云ふことになります。國民の道德的の敎育は學校よりも社會良心の方が有力であると云ふことにりなます。

とは云へ、學校は社會の繼續性を　持

する必要上工夫されたものです。文化が進んで子供と大人の懸隔が大きくなるに從つて、社會にとつて重要なものは常に個人を進歩させると云ふことであつて、そして、其の仕事をする特別な制度が必要になつて來ました。そして、其の仕事をするものが社會制度としての學校であります。學校は、始め、理想と實行を次代に傳へて行くことによつて社會制裁の道具となつて働いたものですが、併し、昔の學校は直接に民衆を制裁したものではありません。昔の學校は一階級の人を選み、これに特種の訓練を授け、そして、民衆の生活を指導せしめたのでありました。

處が、學校がだん／＼擴がつて行つて民衆化するに從つて敎育は最早少數の人に制限されないやうになりました。併し勿論、どんなに智識が民衆化しても矢張り一種の智力階級と云ふものがあつて常に社會を指導することは依然と同じでありますが。其の上に又學校は大商業の起つて以來經濟上の優先權を得る道具となりました。今日に於ては諸國民は、物質上の繁榮を計るため、外國の市場を征服するため、學校が如何に有效な力であるかを認めて來ました。

それより猶重用なことは現代の文明社會は學校を社會を改造する機關であると認めて來ました。其處で、學校の作用の此の變化を跡つけて見るに付いて米國の國民敎育の進歩發達を例にとつて見るのは有益であらうと思ひます。

二、米國植民時代の學校

米國の教育は、先づ、ハーバート大學の創立、則ち一六三三年から今日に至る迄同じ流れが續いてゐて、そして、其の流れは今日の專門學校によつて代表されてゐます。が、これと並行した第二の流れがありまして其れは一六三六年頃から十八世紀の中頃迄來て消えてしまつてゐます。則ちこれは植民時代の小學校でありました。これが植民時代の專門學校に人員を供給したものです。で、其の小學校が消え始まつた頃から十八世紀の終りに當つて益々勢力を得て、そして、十九世紀の終り迄續いて、それから消えてしまつた第三の流れがありました。これはアカデミー即ち中等教育でありました。此の教育機關は米國過度時代の標本的教育制度であつたのです。其の外にもう一ツ第四の流れがありました。これは十九世紀の後半に始つてアカデミーが衰へるに從つて盛んになり、そして、今日の中學校になりました。これが現代の米國の最も標本的な教育制度であります。それから、又、南北戰爭後、中部及び西部に州立の教育組織が統一され、それから、總合大學から專門學校が區別されましたがこれは一八七七年ジョンホプキン大學が設立された時でありました。

　これが最も簡單な米國の教育史でありますが、かくの如くに米國の教育史は三期限に分つことが出來ます。一六三六年から一七八三年迄これが植民時代、一七八三年から一八七六年迄これが過度期、そして第三期は現在であります。初期、則ち、植民時代の學校は勿論英國の模倣

であります。たとへば、ハーバート大學はキャンブリッヂ大學の一部を模倣したものです。そして、其の頃の學校は大學でも小學でも皆宗敎的氣分によつて支配されてゐました。ハーバート大學の規則のうちに次のやうな言葉があるのでもそれは明瞭であります。

『人の生活と研究の主なる目的は、神であり永久の生命である、基督を知ることである。生徒はこれを明瞭に敎へられ體得せしめられなければならない。』

實に、亞米利加の昔の學校は神政、及び、貴族政治の理想を實行する必要上の機關でありました。それで、其の當時の問題と云へば家庭問題であれ政治問題であれ又宗敎問題であれ、結局は神學上の學說に關する宗門上の爭ひに過ぎなかつたのです。

併し、植民時代の學校が、濃い宗敎的の雰圍氣に包まれてゐた故に實際的でなく社會と沒交渉であつたらうと想像してはなりません。其の當時の學校は小學校に至る迄敎育上の理想は社會奉仕と云ふことであつたのです。學校が單に敎養のために存在すると云ふ考へはどの學校の建設者の心にも全然無かつたのです。文化的及び宗敎的の要素は、敎會及び國家に於ける社會奉仕の仕事に服從させられてゐたのです。ですから、大學の卒業生、殊に傳導師は社會の道德的及び精神上の指導者でありました。從つて學力は現代の見地からは誠に狹く貧弱であつたのですが、併し、社會との密着な關係、指導の責任と云ふことに於ては優れてゐたの

です。

三、教育に於ける民主主義的思想の起源

米國植民時代の教育、則ち、初期の教育の理想が宗教的で貴族的であつたとすると、中期は革命的で過度的であつて、そして現代は民主的で社會的であります。いろ〳〵の力が集まつて現代の學校を、自覺ある民主々義の道具としたのでありますが、其のうちでも最も有力であつたものは西部の發達のために西部を開拓しようとして起つた氣力盛んな先鋒（パイオニア）的民主主義の精神でありました。人跡のない土地を開拓して行かうとする精神は商業政治の方面に於て計りでなく教育に於ても米國民を支配してゐました。

此の精神は十九世紀の終り迄は教育界には、はつきり現はれてはゐなかつたものです。其の理由は立法家が教育問題には無關心であつたのみならず又貧乏であつた植民は學校の財政上の負擔を好まなかつたし猶又各地方が社會的責任と云ふ觀念を更に持つてゐなかつたのにもよるのです。又、他の一方に於ける上流階級は昔風の貴族的な教育の理想を持してゐて子女を公立學校に送ることを好まないそれは恰も慈善を求むるやうな氣持ちがすると云ふ理由で公立學校を厭うてゐました。其の上に宗教家は俗人の學校には全然反對してゐたのであります。そんな風で教育と民主々義とは可なり隔つたものでしたが、併し、ジエフアソンやモンローは教育の民主的基礎を常に夢みてゐたのでありました。

そして　敎育に於ける社會的精神を促す力は着々と働いてゐました。そして、ッイには民主々義の問題の切迫が學校を社會制度として認めさせるやうになりました。一體、米國人の國民生活の始まりは狀態が比較的單純でありました。つまり、米國人は單なる一個の新開地開拓者であつて、そして、家庭と農園と弟子奉公組織が實際生活の學校であつたのです。勿論、農業が主もなる職業でありました。けれども、一八〇〇年から一八五〇年の間に、人口に於て産業に於て非常な膨脹がありました。蒸氣を運搬に、電氣を交通に應用すること、及び、機械の發明は生産力を非常に増加させました。從つて國民は食料品生産の苦痛から解放されて大都會に集中することが出來るようになりました。同時に餘裕も出來ました。此の餘裕が出來たゝめに米國民はより高尙なものに興味を持つようになり、より高い智識の要求となりました。そして、益々理解され益々自覺して來た民主々義の精神は宗敎の自由となり、個人企業の自由となり、又、人道主義の勃興となりました。そして、人は益々政治上及び社會上の理想國家を夢みるようになりました。で、此の精神の現れの最も強い例はニューイングランドの文藝復興のうちのエマソンの超然主義と其れに次ぐコンコルド學派のうちにあります。

十九世紀の中頃になつてから其の民主々義の精神は敎育上の理想を全く變更してしまひました。そして、無月謝學校が國民の權利となつて布告されました。敎

育の普及が民主々義の保存になくてならない條件だと主張されるようになつたのです。で、これが中等教育をも無月謝にしようとする運動となり、其運動は成功して、ツイに中學校も無月謝になりました。これが先づ米國の民主々義的教育制度の興隆となつたのであります。

教育は國家の義務であること、國家が教育事業に當ることによつて産業の能率は增進し、よりよき國民が養成されると云ふことが一般の意見となり、其の理想が益々はつきりして來て、移民の同化、國民の融和、産業の進歩、國家の隆盛を悉く學校に求めるようになりました。そして、確に、其の效果はありました。其れに付いて或る人は云つてゐます。『今日學校に於て教へられる思想が明日の民主々義に實現される。故に、もし、政府が軟弱にして無能ならば、學校は生徒に、强くして有效な政府の原則を教へねばならない。もし、市政府が腐敗して居れば根本的道德及び經濟の原則が生徒に教へられねばならない。もし、國民が富と時間を浪費するならば、價値の智識と、如何に時間を利用すべきかを生徒が教へられなければならない。要するに、學校を通じて國民は階級自覺の代りに社會的に覺醒しなければならないのである。』と。

そして、米國に於ては小學中學が民衆化したのみならず、私立大學を除いた外の大學の大部分も民衆化して無月謝か或ひは殆んど名許りの月謝をとると云ふことになりました。

四、教育の目的と道德上の理想

敎育の目的と社會の目的とを同一視するに付いてはいろ〳〵の異つた意見があります。そして、其の一ッは『敎育は進步的社會の要求に從はなければならない。敎育の目的は社會の目的のうちに含められてあらねばならない。なぜなら、分は全のうちに含まれてゐるから。』と。云ふのでありますが、併し此の議論は、敎育家の實際上の創意と、指導する力とを奪つてしまひます。さう云ふ狀態の下に置かれる敎育家は社會の要求の單なる飯盛りに過ぎないと云ふことになつてしまひます。そして、敎育家は社會進步の外に自分を置くこともならず、忠告家として指導の任に當ることも出來ないと云ふことになります。

一體、敎育の目的は普通には個人を社會的に有効な人間とすること、つまり、個人の社會化であります。併し、此の社會的と云ふことゝ敎育的とが倫理的と云ふことに如何なる關係があるかに付いての議論はまだ滿足的な結論がないのです。そして、倫理の目的は社會の目的と同じものであるか、さもなければ、倫理は社會の目的に從屬すべきだと云ふことが一般に認められてゐます。併し、個人が單に社會化したからと云つて其れが直ちに道德上秀越になつたと云ふ意味でないことは明らかです。

要するに、現代人が敎育の社會的能率と云ふことを主張するのは主觀的であつた、舊式の敎育の理想に對する反逆であつて、そして、社會的能率と云ふことは倫理的關係主義と云ふことになります。

これを云ひ直すと、社會的、則ち、功利的行爲に重きを置いて——勿論これは健康的な反動に相違ないのですが——倫理的の要素を多くの場合殆んど無意義にしてゐるのです。つまり、舊式の敎育家が倫理的訓練と云ふことに重きを置き過ぎた結果、道德的生活を實行不可能なものにしてしまつたので、其處で現代の敎育家が是れに反抗的な態度をとつて、社會的能率とか、社會的目的とか、社會化とか云ふ言葉を用ゆるようになつたのです。そして、倫理は生物學の一現象に過ぎないと迄云つてゐる論者もあります。

とにかく、廣い道德上の見地から敎育問題を眺めて見ると其處には三ツの要素があります。(一)は希臘主義、則ち、內觀主義で、これは歷史、科學、文學、及び、哲學を皆個人の道德的開發の道具としてゐます。(二)は、人間の性質の善であつて、則ち、自ら眞、善を求めようとする傾向であつて、(三)は意志の馴致でこれは社會的に價値ある行爲を最も經濟的に最も一般に利益あるように行はうとすることであり　す。

云ひかへれば、眞に道德的となるために敎育は、今日の問題の解決になくてはならない人間の價値を先づ敎へなければならない、そして、民衆が自分等のために此の價値を愛するようにならなければならない、併し、其の價値は單に智力的にのみ理解してゐてはならない、且つ又最善なものを好むことを每日の生活に有效に現す習慣と手段とを持つて居なければならないと云ふのであります。

故に、教育家が實現しようとする理想が社會良心の一部分となる迄は、教育家としての目的を、まだ仕遂げてゐないといふことになります。

五、社會良心の標準

學校が社會良心を增長せしむるために常に記憶せねばならぬ原則は何にかと云ふに、それは學校の最も古い併し今猶最も重用な義務となつてゐる道德上の云ひ傳へを解釋し、それを次代に傳へることによつて社會的遺產の繼續を保證することであります。

處で、今日の教育論に對するルソー一味の哲學から來る批評は、難しい課目の倫理的意義を認めません。そして、今、私共はルソーの自由主義と教育論に於ける自己主張主義から來てゐる缺點を每日認めつゝあります。自由はルソーの云ふやうに單なる衝動の肯定其の主張ではないのです。『汝の思ふまゝに從へ。』と云ふエマソン主義も亦道德上に缺點があると云はれてゐます。なぜなら自由と云ふものは人が自分の行爲には制限があることを明らかに認める迄は道德的にならないのです。道德的自由とは社會の批准を經た社會制度を通じた行爲であるのです。法律、權力及び制度は決して自由を妨げるものではなく、此の三條件があればこそ實は自由が可能なのです。否、此の三條件は自由にはなくてならないものなのです。

個人から計り見た自由でなく社會から見た自由の意義を學校及び社會は高唱しなければなりません。そして、幼稚園、

小學校、中學校、專門學校、及び商業、政治のうちに自由な個人の創意の必要を主張しなければなりません。同時に、法律と社會秩序と個人の自由との關係を忘れてはならないのであります。成熟した國民性と云ふのは個人の自由と法律と社會秩序との關係を適當に調節した處にあるのです。これが民主々義の根本問題であると同時に、又、文明の根本問題です。其處で、學校の仕事は國民が一定の制限を通して彼自身の自由を獲得せねばならぬものであることを未來の國民に植ゑつけることであります。自由と制限は相反するものではなく、分離することのできない道德的及び人間的全部の二部分であることを敎へなければならないのです。

ですから、難しい課目の論理的價値の問題は自由の觀念と密着な關係があるのです。多くの敎育家はジョン・ロックの有名な敎育論のうちに現れてゐる難しい課目の訓練的價値に關する淸敎徒主義の學說に極端に反對しました。ルソーが人間の衝動を感情的に謳歌したことに今日の多くの人は共鳴してゐます。そして、難しい課目から來る訓練は苦しいのみならず、人格を造る上に必要でない。それは不道德であるとさへ云つてゐます。實に、現代の敎育論は古代語學や數學を課目に入れることは敎育上罪惡であるなどゝ云つてゐるのであります。

併し、學校は生活のための單なる準備ではなく、生活其のものであると云ふことが本當ならば、難しい課目を一切除外する學校は生活の準備でもなく、勿論生

活其のものでもないと云ふことは明らかな事實です。そして、何等の興味はないが道徳的に餘義なくされてゐると云ふ意味の骨折りを人生から切り離すことが出來ないのも事實です。併し、苦しいが故に道徳上價値があると云ふわけでなく、骨折りが合理的で、價値ある目的があつて始めて道徳的であるのです。

今日のやうに大多數が樂で愉快なことのみを求めてゐる時に當つては、學校は人生に必要なものを、たとへ、どんなに難しくとも課目の中へ入れて置かなければなりません。そして、道徳的に强い國民を造らなければなりません。そして、此の仕事は現代の特長であるルソー主義に從つたのでは出來ない仕事であります。

凡ての倫理の基礎の中で最も廣い、從つて、凡てに影響する、そして、摑むに困難なものは正義の觀念であります。そして、これは幼年期、及び、青年期に於ては依怙贔屓なき態度のうちに現はれてゐるものですが、此の正義の觀念が凡ての人の行爲の基礎となり信仰とならない間は正義が社會に價値あるものとはなりません。

學校が益々有効に利用され、社會が開發されて道徳上の情操を表現するようになつた時に、學校は社會正義の原則の具體化となるのです。なぜなれば、學校は社會的遺産を次の時代へ傳へる前に、それを批評的に試驗にかけるのみならず、猶又、人間と云ふ材料を選擇し試驗しなければなりません。云ひかへれば學校は個人並びに階級を適當に配置する機關で

あります。

現代の民主々義的傾向の社會に於ては自由或ひは平等よりも同胞主義の觀念が猶一層重要であります。則ち、利他主義の實行が重要です。自由或ひは正義が實現せられる前に此の利他主義の觀念が豊富にならなければならないのであります學校に於て、利他主義を養成するためには、唯、單に一致室に生徒を集める計りでは十分でありません。生活の內觀と云ふことゝ、社會的にものを見ることの習慣を養はれなければならないものであります。

利他主義の自然の結果は寬容の精神です。これは社會的生活に最も必要な條件でありますが、此の寬容と云ふことは單に消極的の德ではありません。此の寬容と云ふことは道德的經濟の內觀であります。つまり、自己發達のために他人の權利を通して自己の意見を實現せしむることであります。共同生活に於ては公平な考へ、寬容の精神が具體化されねばならぬものです。統治、競爭、及び、共同と云ふ文明社會組織の三大形式のうちで此の共同と云ふことが人類の精神を最もよく表現したものであります、未來の一大指導者となるべきものであります。

そして、敎育が生活の準備、否、生活それ自身であるならば學校は此の共同の精神によつてつゝまれてあらねばなりません。同情、利他主義、共同と云ふことが人間社會の始まりであり、同時に、數千年の間、丁度、森の中を流れる川のやうに一時現れては音のみを殘して見えな

くなり、又現れては消えてゐた其の精神を教育が十分に發揮させることによつて國民教育の任務は達せられたのであります。そして、學校が其の精神を完成させる處であるとすれば、其の精神の萌芽は家庭に於て培はれねばならぬものであり其の萌芽を培ふ大業が母の手にある限りは、男子並びに國家は母の其の大業を援助しなければならぬものであります。

新刊紹介

◎お産の前後（内務省編纂）

内務省衛生局から本書は出ました。これは保健衛生調査會委員醫學博士與瀨雄一氏に依囑し母體の衛生上及兒童の保健上最も大切なる姙産婦の心得方竝に初生兒の保育方等に付き注意すべき事項を編纂したものであります。

そして、本册子は實費一部金六錢五厘を以て右册子印刷所たる京橋區北槇町八番地一成社に於て印刷の需に應ずるそうでありまして相當部數御希望の方は内務省衛生局か、又は、地方廳にて仲介さるゝそうであります。

◎鐵道旅行案内（鐵道省編纂）

これは旅行者に缺くことの出來ない好伴侶です。此の書を繙けば遊覽地の經路と概念とを知るに極めて便利です。鐵道によつて旅行する人に必要な條件は全く網羅してあります。つまり、實益上の事も趣味上の事も遺憾なく知ることが出來ます。東京市日本橋區本石町 振替口座東京二四〇番博文館で發賣致します。（定價二圓五十錢・送料十錢）



◎セルボルン伯爵夫人の演說

九月二十八日の倫敦デーリーメールは次のやうに報じて居る。

英國到る處から殆ど七百人の婦人が昨日シエフヒールドに集まつて英國及びアイルランドの『國民婦人會議』の年會に出席した。會長セルボルン伯爵夫人は次のやうに演說した。

『近來英國の新聞雜誌は、我が國に於ては婦人が非常に過剩であると云つてゐます。併し婦人自らは自分等が餘り者であるとは少しも思つて居りません。實に今日に於いては未婚の婦人は自己の生活を却つて男子よりも容易く得られるのであります。故に完全な體軀を持つて居る婦人は職業に不自由は感じないのであります。

　妻として又母としての外に多數の婦人が要求されて居る今日に於ても母の數に缺乏はない。人口は充分に增加しつゝあります。婦人は、又母としての重大なる國民奉仕の好機會を有効に利用してゐます。國民性の創造者であることを知つてゐます。最も鈍い最も無學な婦人と雖も

この大任即ち國民性を造る大任を多少なりとも皆悟つて居ります。如何なる母でも確かに皆愛國的であります。其の點に付ての心配はありません。』と。

且つ又、この大會に於ては、始めて英國生れの婦人ウィントリンガム夫人が議員に選まれた事を慶賀する決議が通過された。

◎女の學位

キャンブリッヂ大學に於ては婦人に學位を授けやうとする運動が既に始まつて居る。そして成功するやうである。婦人運動員の戸別訪問は滿足的な結果を得つゝある。

今年六月十六日に於て實行される筈の投票が十月の二十日迄延された事、又昨年の十二月、この問題が起つた時、事は順當に運んで居ると云ふ想像上、運動を怠つた爲に多くの投票を失つた事は此の運動のために非常に不利であることを委員達は發見して、再び斯ふ云ふ失敗に陷らぬやうに非常な努力を續けて居る。若しこの運動が成功すれば婦人の大學に於ける位地は全く變る。何となれば婦人が今迄入學を拒まれてゐた大學に入學を許され且つ學位を得る資格をもち、自然、教授となり、講演者となり、又は試驗官となり、並びに男子同樣に懸賞論文にも應する事になるから。

◎ナヂエダ孃

ブルガリヤの總理大臣の秘書官ナヂエダ、スタンチョフ孃は倫敦駐在ブルガリヤ公使の娘である。ヂェネバに於ける國際聯盟の會議に出席する總理大臣の一

行の一人に孃は任命された。一九二〇年十一月中ブルガリヤの總理大臣が英國を訪問した時孃は同氏の通辯であつた。孃は佛語、伊太利語、露西亞語、獨逸語及び英語を完全に話し、而してヂエネバに於ける重要書類を飜譯する責任を有すると。

◎新聞王と濠洲

ノースクリッフ郷は濠洲勞働組合の本部を訪問した時一場の演説をした。その演説中移民に關して曰く『濠洲に於ては、英國並びに東洋の移民を、合衆國とほゞ同じ大きさの此の一大陸濠洲から除外するわけにはゆくまい。もし、さうするならば濠洲人は飼葉桶の犬の誹りを受けざるを得まい。濠洲に對して望ましき移民は都市を目的とする移民であつてはならない』と。

◎基督敎婦人大會に於ける講演(二十九頁のつゞき)

次に演壇に登つたのは婦人勞働組合同盟會の會長タックウエル孃で、孃は云ふ。

『婦人にはあゝ云ふ職業は不適當だとか、こう云ふ場所は有害だとか一般に云はれてゐるけれども、併し、正當な婦人は何處へ行つても正當であつて周圍の惡感化を受けるものでない。要するに、職業の種類や場所の問題でなく、人物の問題である』と。

其の次には母の同盟會の會長バークレー夫人が云ふ。

『男子のみの支配を受けてゐる世界よりも、より惡い世界があることを私は想像することが出來る。そして、それは婦人によつてのみ支配される世界である。神は男女同共しての世界を期したものである。』と。



能率の限度

家庭内に於ても、又、家庭外の仕事に於ても、能率を増進するに先づ必要なものは一致共同と云ふことです。甲が努力してどんなに能率を擧げても、乙がいつもぐら〳〵して怠けて居るならば、やがて、甲も氣を腐らせて努力を止めてしまうでせうから。

一體、能率と云ふ言葉は現代の生活に於ては重要なものとなつて居ます。そして、これは、今迄不注意に有形無形の富源を浪費してゐたのを、科學的に使用し充分に利用しようとすることです。で、專門、或ひは分業と云ふことが、今、非常に進んで來ましたが、これは適材を適所に置かうとするので、有益な方法であるに相違ありません。

進化と云ふことが中心思想である現代の論理上の結果は、いやでも組織と云ふことが重きを置かれるやうになります。そして、此の組織して能率を増進すると云ふことは、産業上殊に機械上に計り用ひられる方法ではなく、家庭婦人にも、學者にも、政府の役人にも其の有形無形の仕事の上に無くてならないものとなつてゐます。科學的發明や發見の非常な利益を私共は今享有しつゝあるのですから、私共は、今、私共の手に移されたものを亦科學的に使用し利用しなくてはなりません。

處で、此の能率増進と云ふ問題は一切の經營が科學的となつてから著しくなつたものですが、一體、此の科學的經營と云ふことは機械哲學のいはゞ最後の勝利のやうなものです。つまり、あらゆるものを機械化し

で、ツイには、人間自身迄も機械化してしまはうとしたのです。

此の科學的經營と云ふことは主もに米國のテイラー氏から始まつてゐます。そして、此の科學的經營法のうちに機械的精神の眞髓があるのです。彼は申ます。「能率を擧げさせるには賃銀を增すとか、ボーナスを與へるとかしなければならないように一般には云はれてゐるが併し、それよりも各人の行動をよく研究してそれ〴〵の特長を發見し其れを利用することによつて能率は最大限度に增進する。そして、これはどんな種類の仕事にも、亦人間にも應用出來る。」と。

けれども、此の能率と云ふことに計り重きを置いて人間自身迄をも機械主義で律してしまうことが、人間の幸福に如何なる影響があるかと云ふことについて私共は考へて見なければなりません。

つまり、能率增進主義は、人間の人間的部分を、機械的及び材料的部分から區別をしないと云ふ危險があります。機械の機械的、時間的の働きは確かに有益なものです。けれども、其の機械には人間の意志と判斷が加はらなければ有效ではありません、或る能率增進の研究家は申ました。「人間の勞力のうちには、時間と運動に關して全く機械的にしてしまうことの出來ない點が少なくとも十七八はある。そして、これは、人間の意志と判斷力に直接よるものである。」と。けれども能率增進主義は機械哲學の精神に從つて、人間の經驗の數量的の側計りでなく、性質的の側をも機械的に見ようとします。つまり、倫理並びに宗教が取り扱ふべき部分迄をも機械的に取り扱はうとします。或ひは人間にさう云ふ部分のあることを無視しようとする傾きがあるのです。そしてこれは人間の人間味を破壞することになるのですから、人間の幸福を增すのでなく、不幸の源となります。人間の生活を貧弱にします。ですから能率增進主義は、現代の私共の生活になくてならないものでありますが、併し、これには細心な注意を拂ふ必要があります。もし、さうでないと幸福を增すのでなく却つて不幸の源となりますから。

能率を擧げるに付て、私共が忘れてならないことは一體、人間性には二重の共同基礎があると云ふことです。其の一ツは、私共人間の心は智覺、感情、意志、道理の如き力が共同して存在してゐるのですから、此

づ、第一それ等のいくつかの力を調和させなければなりません。それから、モウ一ツは他人と自分とを調和させなければならないのです。其の上で私共は家庭に又は、社會に奉仕すると同時に自己實現を計らなければならないのです。

要するに各人が各自の役目に忠實であること、又、上の者が下の者を管理するのではなく、つまり、老若上下を區別することなく、平等な基礎に共同すると云ふことが能率増進の最大秘訣であります。そして、これは、家庭内に於ても、家庭外の仕事に於ても同じであります。

實に、精神的の及び生理的の能率を上げるには確固とした基礎がなければならず、そして、其の基礎を造る處は家庭以外にはありません。嬰兒の時から其のエナーヂーと其の慾望を善導することによつてのみ其の基礎は造られます。食物は勿論のこと、與へる玩具、子供を取り扱ふ仕方に至る迄も、子供の慾望と子供の内部からほとばしり出る力とに應じて、誤まりのないように注意することによつて、其の子供が成人した時には其の能率は殆んど本能的となつて現はれます。

編輯の後

本誌が生れてから二年目の最終の號の編輯が終りました。振り返つて見ますと、隨分忙しい日を送つて來ました。遺憾な點が無いでもありませんが、先づ、自分の最上を盡して來たことと一家が健康であつたゝめに、とにかく一生懸命働けたこととを以て自分だけは滿足してゐようと思ひます。

世間は隨分騒がしい年でありました。後から〳〵重大問題がポカツ〳〵と突發して來て實に目まぐるしいようでありました。近くは、自由戀愛問題、暗殺事件勞働爭議と、實に、烈しい渦卷を見るようでありました。中にも農業地に於ける小作人と地主との爭議はいよ〳〵問題が深刻になつて來たことを思はされます。且つ又今は華盛頓會議に於ける米國の態度に付て又々議論はやかましくなつてゐます。これに付て書きたかつたのでありますが、もう、餘白がありませんから、いづれ新年號に書きます。

うつかりして居ると突發的ないろ〳〵な重大問題の渦の刺戟に耐へられないような氣持ちがします。併し私は弱りません。軍備縮小問題は勇氣を鼓して鮮か新らたにして新年號に書きます。

（大正十年十一月二十日）

郷里の兩親へ

原田琴子

お父樣のお手紙もお母樣のお手紙も先達確かに頂戴致しました。繰り返し幾度も拜讀致しました。御兩親樣のお心持それは私にもよく分ります、仰云るお言葉は御無理とは少さら存じません。けれども私としましては、どのやうに思ひ廻らしませうとも仰せの通りに至すことが出來ません。かう申し上げましたのではたゞこの上にも御立腹を深くするばかりかも知れませぬが、どうか一圖に御立腹遊ばさずに「また理屈を云ふ」とお焦だちなさらずに、一通り私の申上げますことをしづかにお聞きとり下さいまし。

「人の缺點ばかりひろつて書き立てそれで學問をしこんだ甲斐があるでせうか、父母は一家一門のわる口を世間へ書き立てさせるために學問をしこみはしません」とお母樣は仰云います。けれど私のあの小說がほんとうに「人のわる口で御座いませうか? 私には不思議でなりません。私は私の小說中にとり入れた人物の何れに對しても公平であるつもりで御座います。それは私は神樣のやうに完全な人間を描かうとは致しませんでした、悲しみもし嘆きもし苦しみもする現實の人間の姿を彷彿させたいと欲しました、人間の心の眞の姿それを寫し出したいためばかりに私はあの小說を書きました。決して復讐的

なまだ反抗的な激情に驅られて筆を取つたのでは御座いませんでした。

『こんな家や親戚のことなぞ書かずに西洋の事でも書けばいゝに』とお祖母樣は仰云つたと伺ひました。西洋のこと！　私がまだ行つた事もない、さうしてまた私の生活と直接何の交渉もない外國の事なぞ如何したら書けます事でせう、それはまるで夢想で御座います。「小說を書きたい」といふ欲いは私の少女時代からの熱い〳〵希望で御座いました、そして私に書き得る小說と申せば私の生活を除いてはありません。私の生活を繪くとすれば如何しましてもその半生を過した家の事やその周圍の人々の事を書かればならなくなつて來ます。

私は誰に惡意があつてあの小說を書いたわけでは御座いません、それがお分りになりませんでせうか私は私の生活以外に書くことが出來ませんでした、そして人物にはモデルがいりました、けれどもペンをとつて紙に向ひました時はその人物はもう私のもので御座いました。私は私の頭に思ひ浮ぶまゝ勝手にその行動をつくりました、事件も自由にこしらへました、ですから申せば『自分の周圍の人達を材料にして小說を書いた』と申されます。見樣によりましてはそれはいけない事かも知れません、けれど私としましては、それが大切な一生懸命の仕事なので御座いました、私は僅かな時をぬすんでは誰にも云はずこつそりとあれを書きました、そして書き溜めて行くことが何よりの樂しみで御座いました。時には書くことが堪らなく苦しくなつてそのくせ書きかけのまゝ棄て、仕舞ふ氣にもなれず、幾日も〱寄

立しい悩ましい日を過したことも御座いました、そんな事を思ひ出します私には如何しても今あの小説の發表を中絶する氣にはなれません。尤ももしお父樣やお母樣が『あんな下らない作を發表するのは止せ』と仰云るのでしたなら再考も三考も致すで御座いませう、けれども『たゞ世間の人々があの小説を讀んで家や親戚の事を惡く思つては困るから』と申す理由では何としてもおきゝ致すことが出來かねます。私の心のなかの虫が承知致しません。

お父樣やお母樣はあんな小説を書かせるために私を女學校へやつて下さつたのではないと仰云います、では何のためで御座いましたらう？家庭の仕事に對してもつと忠實な婦人となるためで御座いましたかしら、それはとにかくとしまして、私の不思議に存じますことは、あの小説が發表されましたごく最初にお父樣の大變な喜びになつたと申すことで御座います、お父樣が何をお喜びだつたのか私には分りませんけれどもあれほどに、私の心苦しくなるまでにお喜びになり人に吹聽もされたことを、今―小説の內容が段々分つて來ましてから――急に中止せよなぞと仰云いますことを思ひ合せますと猶更ら私にはそれをおきゝ致すことが出來かねます。私は決して一時の氣紛れや冗談にあれを書いたのでは御座いません、誰の都合のために書いたのでも御座いません。『家や親戚が世間の人に惡くとられてはこまるから――』とは何といふ情ない理由で御座いませう。

それから實は靜かに考へて見ますと世間の人々はお父樣やお母樣のお氣になさるほどそんなにあんな

小說に留意することはありますまいと私は思はれます。世間の人々――[illegible]鄕里の方の人々はもつと興味中心の、面白いものに牽きつけられますでせう、たかぐ〻ごく少數の文學好きの青年が目を通す位のものでせう。そして左樣いふ青年に對してはそれを讀んだがために家や親戚をわるく思ふなど〻いふやうな懸念は少しも要らないことと存じます。ほんとうにお父樣やお母樣やまたお祖母樣方が御案じなさるほどなんで世間が意を留めてくれますでせうあんな小說に！　どうかこの事を御信じ下さいまし。

お父樣やお母樣のあまりに嚴しい御叱責のお言葉は實は私には思ひの外で御座いました、私は呆然して御返事を書く氣にもなれませんでした。そしてじつと考へて見ますと悲しう御座いました、自分では立派に公平な立場から書いたつもりでゐる　あの小說がたゞ人の惡口としかお受け取り裁かれぬといふことはつまりあの小說の價値の低いことを裏がきするものと思はれるので御座います。すぐれた作品で御座いましたならきつと何人の心をも感激させずには置かぬことゝ信じます。殊に私に向つては深い愛情をおよせ下さる筈のお父樣やお母樣に理解して戴けませんとは！　私は改めてあの小[illegible]價値を疑はずには居られません、そして暗い方へ〳〵と心が惹き込まれて行くやうに感じます。でも私は絶望致しますまい。私はあらゆるものに堪へて生きる覺悟で御座います。

これであのお手紙の御返事になりましたでせうか、どうか今更あの小說の發表を中絶されません私の心持をお察し下さいまし。

教育社會學講話（第十回）

人口論

年齡と性の差異

國民性の相違即ち生れ場所によつての性質の差異を分類する外に年齡と性とによつて分類する事も、人口の統計上有益な事であります。學校教師はそう云ふ風に學童を分類する事が便利である事を承知してゐますし、又、さうするように命令されて居ります。

自然は兩性の數が殆ど並行するやうに注意して居るように思へます。時々、二パーセント乃至三パーセント以上の差がありますが、これは其の原因が自然にあるのではなく社會にあるのです。そして、この不平均の主なる原因は移住であります。何故なら、最初移住するものは大抵男子でありますから。歐洲の多くの國々に於ては女子の

方が男子よりも一パーセント乃至六パーセント超過してゐる事を國勢調査は示して居ります。合衆國に於ける一九一〇年の國勢調査に依りますと女子の超過した州は僅か六ケ州を上らないのでありますが、西部の九ケ州に於ては男子は二割を超過し、他の六ケ州に於ては三割を超過して居ります。そしてネバダに於ては男子の方が七割九分も多いのです。勿論斯ふ云ふ不平均は社會組織の凡ゆる形式に重大なる結果を來しますが殊に學校の如きものに影響を及ぼします。

年齢に關しては一代々々に於ける人口を考察するのが普通となつて居ります。勿論一代とは一期限に生活する民衆を云ふので、人間の平均した一生を云ふのでありますが云ひかへますと親から小供に移る期間を云ふのです。そして、この期間は凡そ三十年から三十五年であります。

けれども、學童に關しては數へ方が全く違つて來ます。同じ程度の一組の小供を含有して居る教室に於ては學童即ち學校の人口は一年に一回完全に代ります。中學に於ては五年間が一代、大學に於ても略その位ひですから、小學校の六年と中學の五年と

そして大學の四年と、又或る場合には猶其れ以上の專門學校の年限を加へますならば例へば法律家、醫者、傳道師、敎師、或ひは其他の高等敎育を受けて居る少數の人のように、さうすると學校一代は十五ヶ年から二十ヶ年に亙ります。けれども、之等高等敎育を受ける者を除いた人口の學校年限は先づ六年から十二年になります。ですから一世紀の中に高等敎育を受ける者の學校時代は六代になります。そして其次の敎育を受ける者は十二代あります。そう云ふ風に分けたならば先づ實際の事實に近いものになりませう。そして二十五年間同じ小學校に奉職した校長はつまり四代の小供達の敎育を監督した事になります。

又、年齢に依て人口の分配を知らうとする時は主に死亡率に依ります。生れる小供の數は大抵毎年同じであります。小供の死亡率は嬰兒の時代に於て最も高く、少年から成年になるに當つては最も低く、二十五才以上になると又高くなります。それ故土地生れの人口に於ては或る一定の年齢の人の數は常により高齢の人の數よりも多いのであります。米國の黑人は非常に短命でありまして四十五才以上の人は僅か一割四分

であります。併し白人の一割八分は其の年齡以上に達して居ります。

性の分配と同じく年齡の分配を以てすれば先づ通常の狀態から變化する大なる要素は移住です。合衆國に於ける移住は二十才から二十四才の男子の人口が十五才から十九才迄の男子の人口に超過する事五萬三千であります。若し外國で生れた米國人を別にするならばその一割一分は二十才から二十四才、十五才から十九才の者は四分七厘そしてより若い者はより少い比例です。ネバダ州に於ては十四才以下の子供は人口の只二割を占めて居ります。でありますのに他の多くの州に於ては三割又は四割を占めて居ります。

併し新しく開いた農業社會に於ては小供の比例は大きいものであります。一九〇〇年から一九一〇迄の十年間に人口の最大增加をなしたウイスコンシン州の中の四郡に於ては六才から九才迄の小供のパーセンテイヂの增加は一割强でありましたそして同じ年限內に最大減少を來した他の四郡に於ても平均九分弱でありました。

若し今申した增減を以て極端として他の地方の增減を附加へるならば小供の人口の

比例の大きいことは依然として繼續するでありませう。大きな都會を有して居る郡を除いて、二割以上の人口の増加を有する郡は二分以上の減少を爲す郡よりは小供の比例がより大きいのであります。確かに新しい土地を切り開くと云ふ事業は若い家族を引き付けます。其結果第一の小供の時代は次の時代よりも大きな比例を有すると云ふ事が往々あります。この傾向の結果として或る人が次のやうな經驗を話しました。

『私の故郷の或る處では十五年間に小供の數が四十人から六十人に増加しましたので古い校舍の二倍大きな校舍を造つて其増加した小供の爲に準備しました。處が次の二十年間には小供の出席數が四十五人に減つてしまいました。私が通學してゐた學校でも其の時分には凡そ五十人居りましたが、今はたつた十八人に減つて居ります。』

小供の比例の斯ふ云ふ風に増減する事は學校區域を造るに付て疑ひなく非常に困難であります。ですから、人口の少ない田舍の學校問題に於ては遺傳的な困難が益々大きくなります。時とすると人口が特に少ないと云ふ程でない地方に於ても困難が生じます。一九〇八年から一〇年迄の二年間にウィスコンシン州の學務員の報告に依ると

八十七ヶ區の小學校はその出席人員數が五人或ひは以下であるさうです。それ等の學校の中三十は以前より殖民して居る十一ヶ郡の中に在るのでありますが現今はその人口が減少しつゝあります。又、他の八ッの學校は一哩四方に人口六人以下の三ヶ郡の中に在るし其他の四十の學校は一哩四方に六人から十八人の住民を有する十一ヶ郡の中にあるそうです。

合衆國に於ける敎師

一九〇〇年の國勢調査に依りますと合衆國の敎師の總人員は四十三萬八千三百六十一人であります。この數は全人口の千分の五十八に當ります。一八五〇年の敎師の數は全人口の千分の十三でありましたが、一八七〇年には丁度全人口の千分の三十一でありました。敎育の重要さはこの數字に依つて計られます。そして夫れは敎育に費した金額よりも敎育の普及の程度を能く語つてゐます。敎師と人口の比例が五十年間に四倍以上に增加しました。女敎師の比例は益々殖えつゝあります。一八八〇年には女敎師は敎師の總數の三分の二以上でありましたが、一九〇〇年には殆ど四分の三を占

めて居ります。實に敎師と人口の比例の增加は何時も女敎師の增加となつて居ります。

敎師として奉職して居る人々の中にどの位迄國民性の違ひがあるかを見る事は興味ある事であります。豫想通り亞米利加本土で生れた敎師の數が大多數を占めて居ります。外國で生れて敎師になつて居るものは極めて少數であります。又外國人を兩親として居る敎師の數も多くありません。でありますのに他の職業に於ては外國生れも又外國人を兩親として居るものも皆同じであります。職業に從事してゐる各國民の總數を、(勿論兩親は外國人であつても米國で生れたもの)數へ、其中から敎師を職業として居る者を撰び出しますと女敎師に付いて次のやうな結果が得られます。

本來の米國人の子孫が一割八厘、カナダ英國人が九分。英國人及ウエルス人が八分四厘。スコットランド人が九分三厘。佛蘭西人が七分三厘。ノールウエー人が六分一厘。アイルランド人が五分六厘であります。他の國民の中で敎師を出して居るのもありますがその數は一パーセント以下であります。つまり一世紀に於ては彼等は充分に亞米利加化する事が出來ないと云ふ證據を示して居るのであります。

本誌第一號からの主要論文を此處に列記して見ました。

第一號　社會と婦人
　文化と文明

第二號　「賢明家庭婦人と政治
　家庭と家屋と文明と
　美學の眞髄
　氣候と勞働

第三號　婦人の解放とは
　繼母に附ひて

第四號　婦人運動の發達と其の傾向

第五號　性的教育
　男子の婦人論

第六號　結婚に對する現代人の態度
　婦人の經濟的地位と貢獻

第七號　婦人と社會奉仕
　女權と子供
　女性の直覺

第八號　本能の醜惡から本能の征服へ
　米國婦人の生活と婦人參政權
　青年男女の交際機關
　道徳と藝術

第九號　新マルサス主義を否定す
　ミル著「婦人の服從」の梗概（一）

第十號　男性文明の末路
　ミル著「婦人の服從」の梗概（二）
　產兒制限の倫理的批判
　選擧權と黑婦人
　小學教員と母性

第十一號　母性の革
　天才、遺傳、環境に附ての考察
　スペンサーの婦人觀
　再婚に付いて
　戀愛と性慾

第十二號　男女關係と母子關係
　ミル著「婦人の服從の梗概」（三）
　健全なる人生觀が現代政治の不安を一掃する
　「男らしさ」の定義を變更すべき時

第十三號　再び家庭の危機に附ひて

本誌定價表

一册	金二十五錢	送料五厘
六册	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二册	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

◎雜誌代及郵稅は前金の事御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと◎郵券代用は五厘切手にて一割增◎廣告は御照會次第御相談いたします

大正十年十一月二十三日印刷納本

大正十年十二月 一 日發 行

東京四谷區南伊賀町四一

編輯兼發行人 山田嘉吉

東京神田區仲猿樂町十七

印刷人 大杉直太郎

東京四谷區南伊賀町四一

發行所 婦人と新社會社

振替東京五三六八八

『婦人と新社會』第二拾二號　大正十年十二月一日發行　大正十年十一月二十三日納本　大正九年二月二十三日第三種郵便物認可

